

企画・編集：対馬義人 群馬大学大学院医学系研究科 放射線診断核医学

福島康宏 群馬大学大学院医学系研究科 応用画像医学

序 説

医療の安全と質の確保についていまさら強調する必要もないが、その本質について理解することはなかなか容易でない。意識するしないにかかわらず、日々の実践のなかに取り入れられていなければならないのだが、どこか自分には関係のない世界のようにも感じられないだろうか。

滝沢牧子先生はこの世界のプロとして群馬大学附属病院の安全と質の確保について日々尽力されている。簡潔にまとめられた総論をいただいたので、ぜひとも熟読していただきたい。医療の複雑化に伴い現場はますます多忙となっている。マニュアル化したところで実践できなければ意味がない。safety-I からsafety-II への移行はこれからの課題であるが、いずれにせよ組織の一人ひとりが「我が事」と感じられるようになれば、それぞれの医療機関の安全文化として昇華するに至り、理想的である。

放射線部は、医療機関における一般的事項に加えて特有の安全確保が求められる部署である。CTやMRI検査における体内デバイスなどについての配慮は、その多様性の増加とともにますます複雑化している。どの施設でもヒヤッとした経験が一度や二度はあるはずである。持続血糖測定器(CGM)やインスリンポンプはこれからますます普及すると考えられるが、CGMには一度剥がしてしまうと再装着できないタイプのものもあり、しばしば混乱を招いている。MRI検査における内視鏡クリップも、特に他院で処置されている場合などは留置していること自体が明確でない場合もあり、撮影の可否をにわかに判断できない。

放射線治療における業務プロセスの複雑化も悩ましい問題であり、多くの事故発生の種が隠れている。今回の特集に含めることはできなかったが、患者のみならず医療従事者の被ばく管理、コミュニケーションエラー(検査依頼や結果報告など)の防止、核医学検査・治療やIVRにおける配慮、感染症をもつ患者の取り扱いなども放射線部に特有である点が多々あり、医療機関全体として取り組むべきものである。

事故の発生は、患者のみならず医療従事者に大きな負担を生じることも忘れてはならない。今回の特集が良質な医療の提供に少しでも資するものであれば幸いである。

対馬義人